

環境病理学入門（槻木恵一）

Introduction to Environmental Pathology (Keiichi Tsukinoki)

キーワード

- ① 口腔科学
- ② 環境病理学
- ③ 唾液検査
- ④ 腸—唾液腺相関
- ⑤ 歯周病・自己免疫疾患

授業概要

病気の発生には、外因と内因がある。外因には、感染症や生活習慣病などがあり、それら要因と内因の要素とバランスで疾患は発生する。病理学では主に疾患の発症メカニズムに焦点をあてた疾患病理学的研究が多いが、環境因子がどのように影響しているかを主眼とした環境病理学的研究も重要である。特に口腔は、外界との入り口であり外因の因子が生体にどう影響するかを、特に感染症モデルでの研究成果と食事因子における口腔粘膜免疫の変化に関する研究成果に焦点をあてて講義する。

授業科目の学修目標

環境要因は病気の発症に極めて重要であり、環境病理学は環境要因に注目した疾患の発生メカニズムの解明と同時に、健康に過ごすための予防医療の構築までを包括する学問であり、本科目では大学院レベルにおいて必要な知識を修得することを目標とする。

授業計画

- ① 病理学の意義と病理診断学の基本
 - ・病理学の歴史と研究技術の進展 2コマ 槻木恵一
 - ・病理診断学の基本 8コマ 槻木恵一
- ② 日本病理学会における倫理規範と検体の取り扱い方の基本 4コマ 槻木恵一
- ③ 環境病理学的研究論
 - ・ストレスと生体反応論 4コマ 槻木恵一
 - ・細菌感染と歯肉組織反応論 2コマ 槻木恵一
 - ・食事要因と腸—唾液腺反応論 4コマ 槻木恵一
 - ・環境因子と唾液による生体情報解析論 4コマ 槻木恵一
 - ・歯周病・自己免疫疾患の理論と唾液による疾病重症度解析論 2コマ 槻木恵一

教科書および参考書

槻木恵一監修：非侵襲的検体検査の最前線、シーエムシー出版、2015年

履修に必要な予備知識や技能、および一般的な注意

環境病理学研究論では授業項目と環境病理学分野で発表された関連する論文を熟読し、概要の理解が求められる。

大学院生が達成すべき行動目標

- ① 病理学の意義を理解し病理診断学の基本を説明できる。
- ② 病理学研究領域における倫理規範を理解し応用することができる。
- ③ 環境病理学的研究論を理解し実践することができる。

評価

試験	小テスト	レポート	成果発表	ポートフォリオ	口頭試問	その他
40%	0%	30%	0%	0%	30%	0%

評価の要点

- ・試験は、授業計画で行った講義の知識の理解度を判定する。1回40%
- ・レポートは、環境病理学的研究論の5項目について課題を提出する。6%×5回=30%
- ・口頭試問は、授業終了後毎回行い知識の理解度を判定する。1%×30回=30%

理想的な達成レベルの目安

環境病理学入門の理想的な達成レベルは80%以上とする。特に、倫理的な理解に関しては100%を求める。